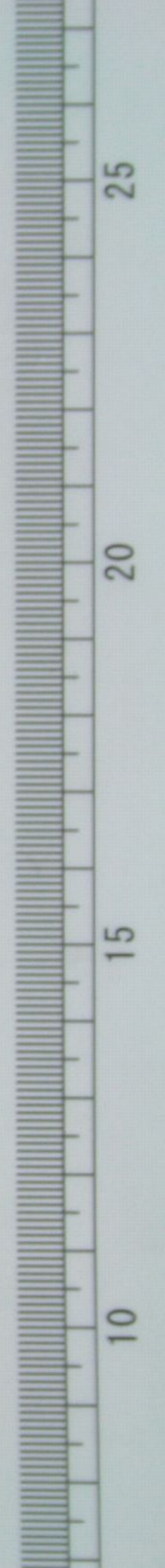




起
落
録

特別
14
1919
637



起居摘錄

昭和十年十月次降



一日一丈

176902

昭和十年起辰汪福松

十月

撫壇漫筆存稿古詩辰禮祀之交付

二十五日

先子辰墓之墓後之墓

在河海壽寺本堂建祭二竹全五

十田守附

38- 9425

十月廿六日安田善次郎、支那書局
代金二千五百圓受領

十月廿八日歌舞并伎屋の道送知徳成
し舞臺式を行ふ

富山急須、美濃、中山、野村、徳の原稿
を授け、

讃岐市、松尾、松尾、福見、宗持の印章

七贈り、辰夏、金目也

○十一月三日坂口五峯十三回忌の法要に
招へられ叙園、宗席上一坊の道徳
法を為す、

○白根同方館の為め扁額二枚揮毫
○健文社の雜誌「日本趣味」余の文章を
録法評を招く

○金三千圓也才二場の十は支本へ定期貯金
をすす

○本山へ入山御拝儀編纂ありのきこ道
子野則を書きおこす

○血海の有志者海龍寺に遊遊は
の化名神と連つ十七日招へて臨む

○山部東洋致後五十年市山ふま

銅像を起り早稲田大寺に献す^{十月}廿三日
除幕式を行ふ

○十一月十一日故和田菊夫の為め金堂
前祀とす神田川に追憶分を贈る

○以治帝行幸六十年記念の上野祭に参
り懐古展覧会あり行き見ふ

○羽田の紀成栗林に貝視重三ら起身

○五月底を以て茶と唐草、入浴、酒と烟草
を五分瘠す

○日本国を以て極分能く修め、余の隨筆
を以て以て之の請求を以て云ふ（五月六日）

○京都府を以て在りてその見ゆるは也

○今打降るる千の地帯、二行印税の四上十回
行ふ（五月六日）更々、陸地を以て五十四回行ふ

○土を以て直中、千の商客との境界の板橋を
終る、大五千回三日の事

○千の地の事、同方、五印、地を以て
代三千回、向二千回、定期預金として
一年間、信及、銀行、預け入る、右を以て
日記、一、定期預金、二萬回也

二月六日熱河へ赴き、聚楽に假し、成徳
の碑を見、海蔵寺の遺徳の墓を
展し、交神会を祈い、境の改良を
あめく。

本年の雑詠を、雨子雑詠」と署し、毎日
筆法

一月十五日石川千代松協士以後一週年軍

人分破：松て、~~遺~~遺傳分ち、防彦

相馬津分比念出歌、維新文を考す

政界継承に階業上を考す

一月廿一日無礙院解散て

寺嶋末峰の本派寺の痕を懐古

余の投稿御出目控をぬり、雑詠「百忌路」に

揚州（二月廿一日）

二月二日 殿 美と後す 是 福内 鬼外
中山 房の 嘴と 居し 百 餅 年 典の 心 意 刻の
項を 稱す

一月廿八日 坊内 通の 法 師 (二 四) 期 經 上
臨 去 今 坊 永 樂 リ 云

平 水 澄 の 日 本 中 世 期 の 精 神 生 活 并 津 原 貞 貞
惟 の 言 文 類 の 精 神 生 活 と 後 記

二月四日 柳合の夜大雪

横濱野史 邦里と出版計畫あり

春と標記を考へて定あり 二月五日

二月七日 徳文社出版の春城開法（高）の届書に 誠

印す又千尋に 換印と 換す此 部 刊 六 百 五

部 二 回 出 丁 也

放 送 局 へ 謝 金 四 十 圓 別 未

二月十日朝大鵬カスルニ三日間臥す

加海の流波頭樂の所築記念海列の道是遺
墨二十一粒付

以治経来に逸華ナホラニ小篇を投す

二月廿一日太田為三介死去

二月廿六日相陸軍古年將校首相内相

（松本清純名）

花相流之教言は整む不祥事起
り、戒書令を布く

恐怖の日廿九日迄の、と同日兵火と交へ不鎮

定岡田首相生存

此の牧逆子件、關係者、その十九名皆互

互壯健也

談を著し七考あり

丙子春休才四日宿を同寺於新河に寄り
改改地筆秋山湯の序を此の三月十日
擁炉漫筆に成す

三月廿一日紅葉館、赤城宮をめぐり中より
也利地筆と押巻を今号に収め未公二十
名翌日九河に赴き飛出た庭園に遊り

成妙柳北の碑七絶、遠道の墓を偲す
今津ハ一と十都年茂公の在り貸し此
のと洲に五万の書をもよおす

新考の回廊一三命高皇のより囀り成し
三考の 法金三十回別未

余の地筆左長長、地筆大云法本に死山
亦平しと探紙を需めし

予の序一に御後中志上巻出候四月四日入
手、
春城會より余の年祝に念ふ代り
田畑より銀を購ひ、
早文出候部不況の爲り余の考へべきは
方金より一年有候不況あり候は
やく内金三千圓銀取 四月九日

紀政雄死去 五月十日
先指のいふ事より新考よりレントゲンを
進め候方より五月三十日の候より未全
七歳 五月一日候
丸薬より号候方より御金二十圓利未
出候部より御金三千圓の御金
義の定期預金より七歳年入

高山房五十年記念に小野梓全集二冊を
出版す。余の序を収む。五月七日。

五月十一日 桂村宗六の追憶を収む。臨む。

五月十七日 大隈熊子の三年祭を臨む。

文藝春秋社発行の雑誌「新」に余の撰の

泡盛を掲載せんことを原稿を返す。

五月廿二日 下村松山追憶を収む。并道子送祭。

臨む。

五月廿三日 二三日病臥 此間回顧録に著す
而予雑誌に著す

六月一日 送川の詩を収む。國に遊ぶ

新潟に於ける記を収む。頃の追憶を収む

三十枚執筆す。而予雑誌に著す

昭和十一年送祭

温故令廿五年紀念 黄金桂の萬年草

七月十九日 東京にてありし古田の校友會
の臨時一泊旅行に四泊五日

七月二十日 大隈邸にて文相邸會の座談
ありしとありし予の親友古田氏より
會よりして古田氏ありし會よりして古田氏ありし
ありし

七月廿日 五〇〇名 都下防室演習

と行ふ

五十二の標地未収獲七十九日 徳内
洋会寺本寺より寄附金六十二日也
送金 七月廿日

余の随員中林子平の二命を金子元佐
編纂家の砂俣中孝四法渡本に標入
者間り他九五九十二

法華經寺

七月廿一日 中山 法華經寺法華

の本山日帝上人を開祖とす

日法全命法隆の祖長(文)とす西の

社名に日法經也

龍峯三別難志經史二枚す

乙卯年とす千五の田又領慰名金預けの

内金也 八月四日

早大足堂年八家の逸業昔の考と送

行元とすこの考余一冊の撰南と

と不流又他の七冊の撰は五十五

本 江山山岸中村西村佑家(印)本

辨とす是行考是考是考とす行考

白鳥有考也

の法華院寄りの女子用の科書世に四

又蓮花堂の臨筆、文人墨客を誘ひし内
馬琴の記室お吟の一命を撰ぬ
す八月

■重訂し「同誌の要訣」を撰ぬと曰き沈
ふ要訣と書す。

美佐七の九月号の巻致言と書き、
同書館雑誌九月号の書札の類「一編

と書す八月十四日

雅法塔敷の深秀園記をぬき、その
き一文を撰ぬと曰す

雅法塔敷の梅干と鮭一節の二編
を撰ぬす八月十五日

内子中店再書の気味よしと書す八月
十五日

昇給方家河伴那給：赴と二の河を
任し物也

内子り能登血臥床十日を住し暁と回復
八月末日記

白雲山人「一」命を兼録
チスレリ「一」條を獲也

南山の「一」云の人の言の御金の十四日未

昂と那江への後傍文流石海とすしを

以して開始 九月而司

難治の「一」命を兼録

鐘合に流の片漱龍の寺を命めて修す
九月十日

難所録と見し隨筆と出さる毎毎

日課十夜行の日記を作ることと始り既

日十拾の七怪百數十枚の題成る
集楽のこの亦十ム、ライクに法云と変候
書の一編と云ふ事
書と云ふこと中、房の井主次、中録美の死云
九月廿六日
新書のり書此の嘆と云ふに法按士の田中
の垣取きこと評しある事と云ふ事

龍法親史と云ふもの全二十卷の刊本
真の桂の中、隠退と報く事
守山、嘉永三十五年、徳田、全三、折、
早大出、後、と云ふ由、治、余、の、版、金、の、由
也、十月十日
十月十一日、元、後、越、く、巻、卷、并、立、治、向
母、訪、問、の、事、也

十月廿一日夜の時放送(この日の需も送
奉の思ひ出まのき放送)をゆま 十月十日

富山、法創五十年記念の全五回贈
り来た 十月十日

十月十五日富山五十年記念の祝会
に招く(富山会館)

十一月七日新潟王堂竣工式に招く奉

祝会令に招く 富山地方(富山)
重信会品花瓶を贈
り

十月廿一日稿定(の如く放送)を畢る

十月廿三日富山美術会に去
洋本館(一)の備記録を交す(近藤文を去り
す)

前日放送の原稿を補修して(改定)を
す

此書其の...

放込陽令... 金四十四州来

癸肝録者部... 子龍廻の原稿を白鳥者

老... 文付十月廿九日

新河南谷の... 中昂の妻と迎へり... のき... 南谷家

の内容... 神堂を境... 依拠り安樂... 神

書書... 大体差支り

あはれ... 抄正の文を書法... 今龍伝
并、都... 十月三十日

昂儀... 十月三十一日... 淡草金四方

七家... 以上の法念を...

昂佳... 法納... 於七元換... 十一月

統... 吹男... 托す

十一月六日... 江... 於... 時... 比... 平... 伯

の韓旗の方面と余の喜喜を祝せん後
待せらる

十一月七日回会議事堂の竣工式に祝せん
此の日の為め大席

日本聯合会十年國の発展を祈り古年の自
愛と自祝の一と命とをなす

軍大出陣五十年記念に紀念式代りて

金五万圓を贈る十一月九日

不用洋装本二名又六十冊紙部處に資印
を託す

即位塔式日十一月廿三日と定め上野新
野に神前式を執行の所を校舎

小宴を催すことと決す十一月十日
浅草傳道院に十三十四日の待公後祝

今日同有陣列令と催し主として主友の
田舎者等所村本を陣列す、尚休令の同
人との同の進陣令をいしし
三四期大らふ(安心)元去十一月十五日
はは角分及お六只記放く飯七個送る
十一月十六日越休令と長辭任
内赤入(意)は時技夜守令其のゆへ全

三百田贈る

十一月廿三日 新嘗祭午後二時上
粘黍新二粒七先の神前日誓式ヲ
行い五時より投書令と開く未令
三十名此費用田ち七十二田外に配る
菓子代四十田也
十一月廿四日 所幼の家族を招飲

十一月廿三日村崎晴雄死去

雪の朝二つ南大段朝日の囀り春の香
積

十一月末八日老田義治中の葬儀
臨去、築地本願寺、東の東本願寺流
るん、東の東の若支あり西と今場所
借し也、今奉者一萬二千と注す

早稲田大谷出取部創立五十年
リ紀念品出取部スプリンターと名
七十年、十二月一日

十二月五日尾崎行雄が
日蕪河友と書留の香堂花に松久は行
余の技藝を授けし英文大日本化海
那の場の場とも出取部創立五十年

十二月十二日 元印 慶母とて二箇合二行
養のあはれ

皇國に皇命を遣はすの格とあり支那に於て
良將亦不監禁の兵を交す

同書 皇國に皇命を遣はすの格とあり支那に於て
一六十四年 皇國に皇命を遣はすの格とあり支那に於て

大正初年の皇命を遣はすの格とあり支那に於て

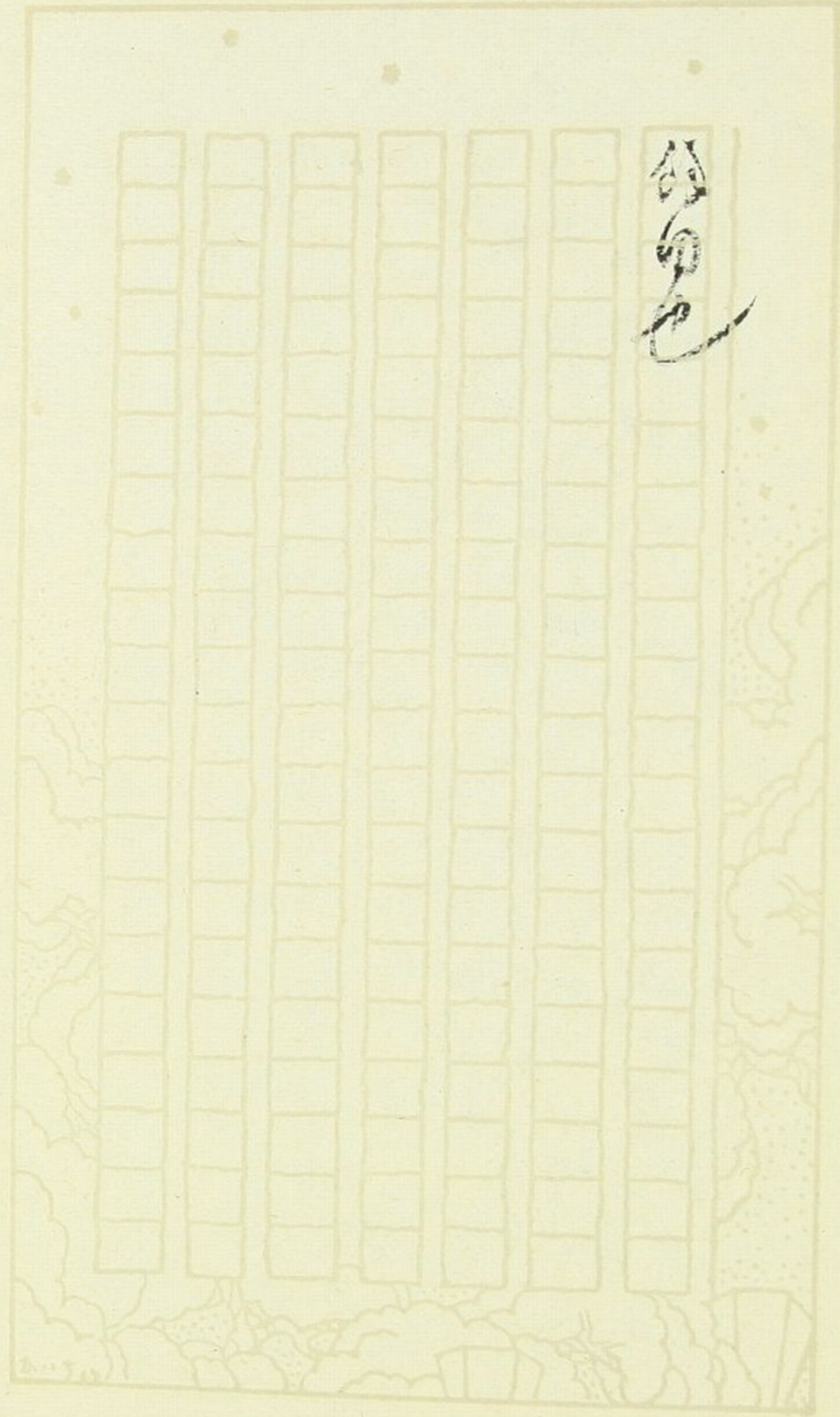
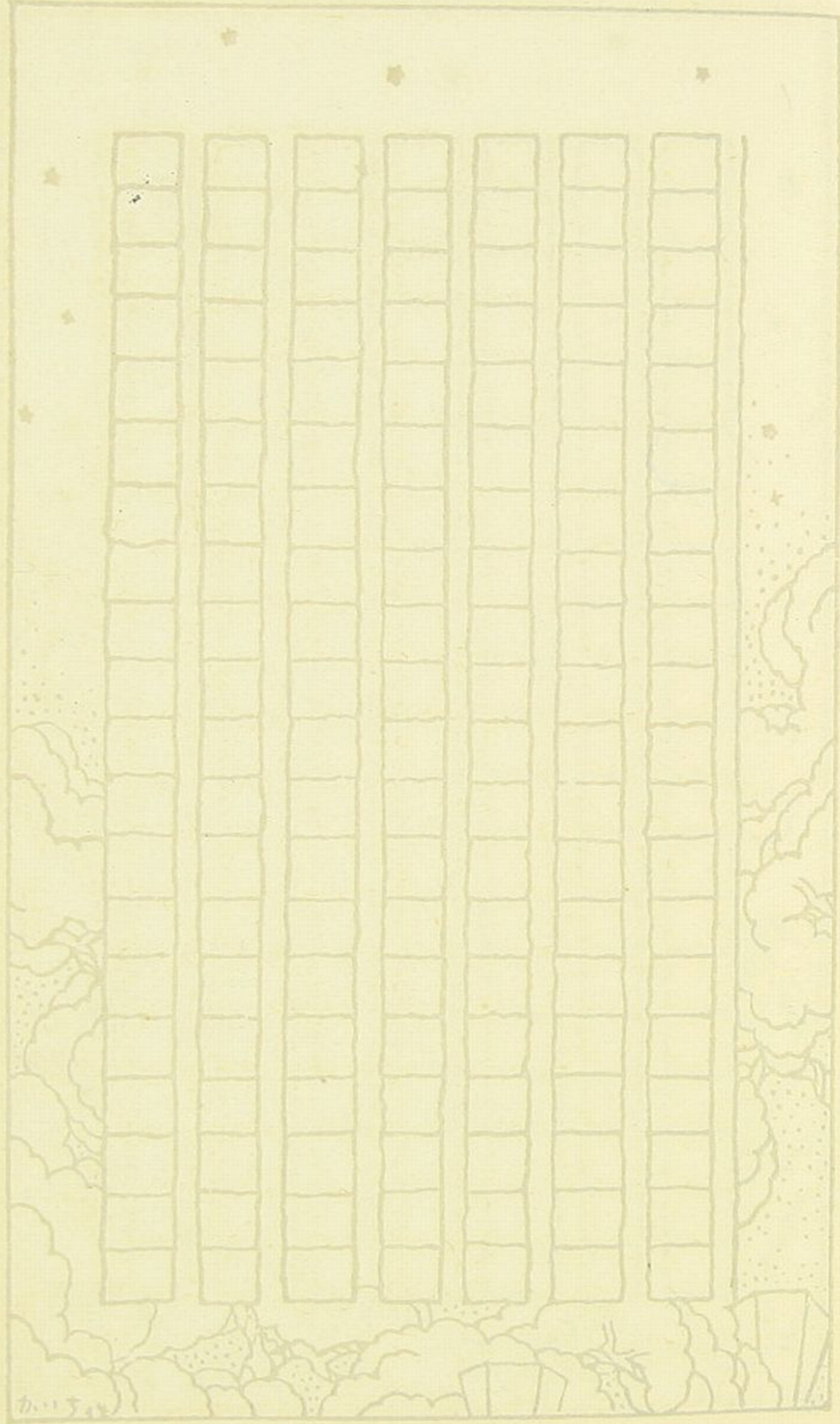
皇國に皇命を遣はすの格とあり支那に於て

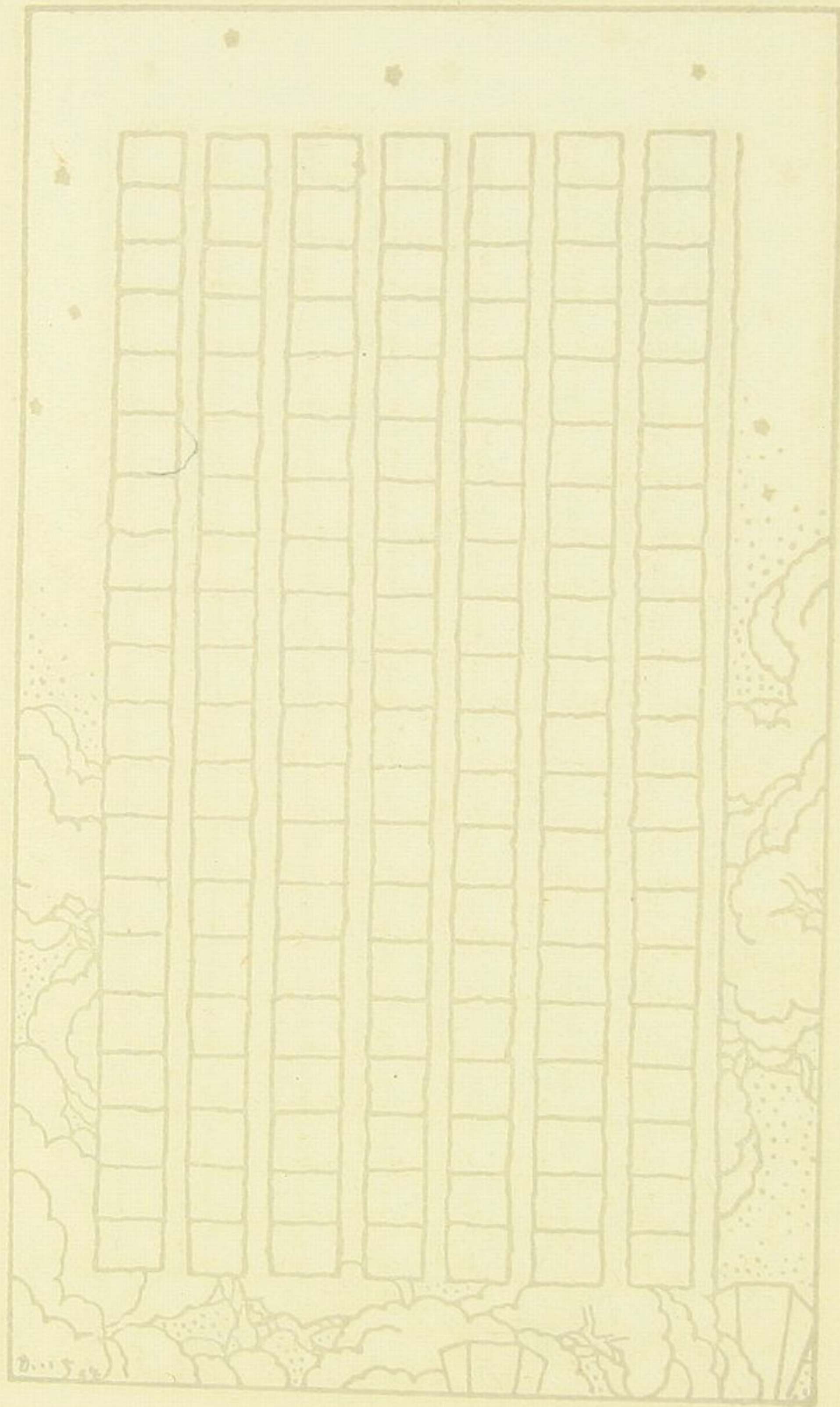
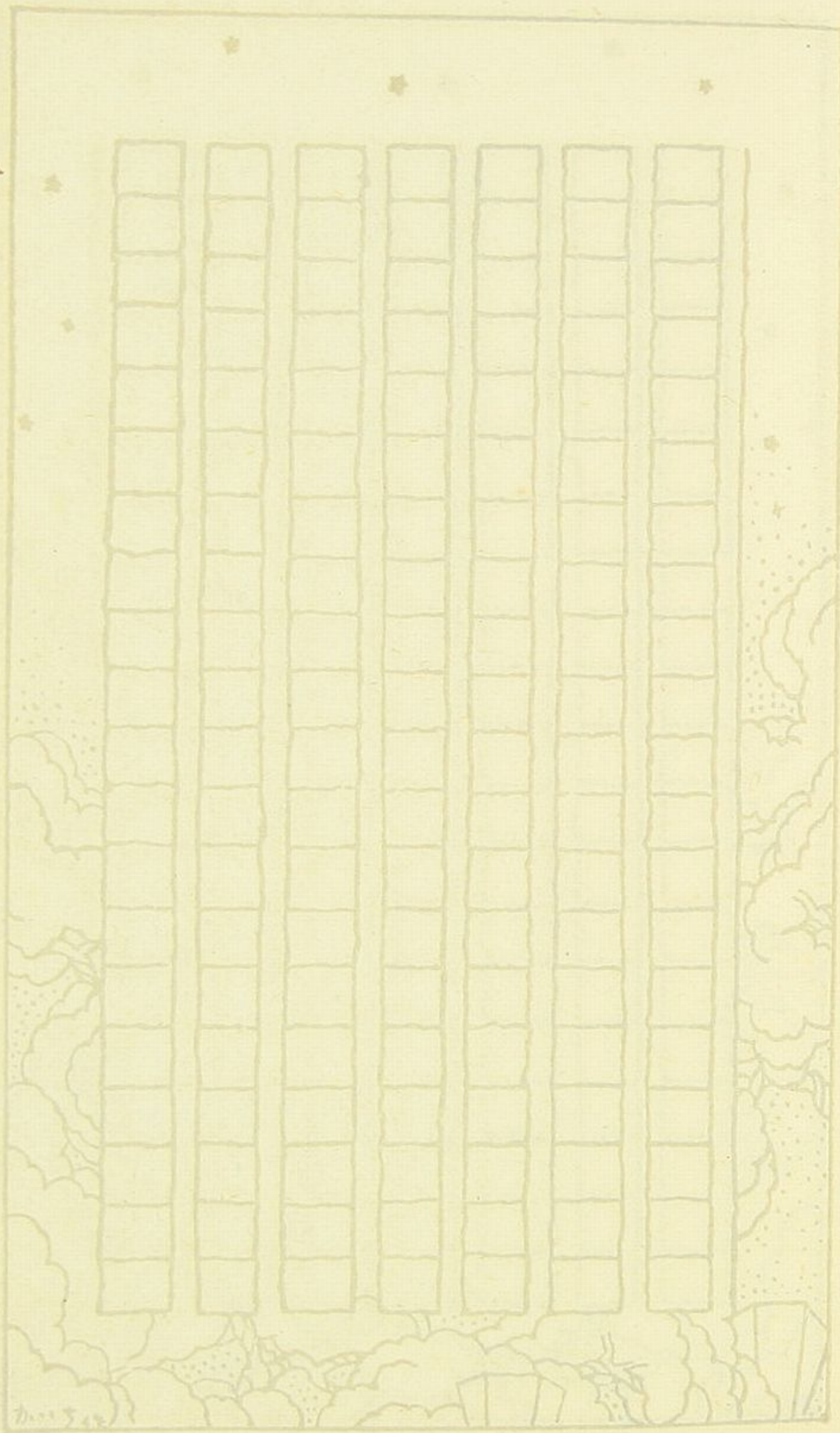
十二月廿三日 皇國に皇命を遣はすの格とあり支那に於て

大日本印刷本朝配当七令五令

早大出版部配当六令

十二月廿日 皇國に皇命を遣はすの格とあり支那に於て
皇國に皇命を遣はすの格とあり支那に於て





以下
3丁
白紙

